

日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース
1998年 秋号 No. 12

全国に広がる行動分析学： 来年の年次大会は北海道医療大学に決定!!

平成11年度の第17回日本行動分析学会大会は、北海道医療大学にて開催させていただきますことになりました。

北海道医療大学は札幌に隣接する当別町に所在し、札幌市内からはJR学園 都市線を利用して約50分の距離です。多少不便なところですが、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

なお、大会の詳細につきましては、近日発行予定の第1号通信にてお知らせします。

日 時：1999年 7月29日（木）、30日（金）

会 場：北海道医療大学（北海道石狩郡当別町、JR北海道医療大学駅下車）

日本行動分析学会第17回年次大会準備委員会
委員長 岩本 隆茂
事務局長 渡邊 芳之

関西で初めて公開講座を開催します!! 「冬の京都の」行動分析学会公開講座 '98

ヒューマンサービス領域における応用行動分析：
プロフェッショナルのツールとしての行動分析学

日 時：1998年12月19日（土曜日） 2：30～5：30

会 場：立命館大学 衣笠校舎 啓明館1F 311教室

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

行動分析は、様々な職業領域で活用されています。それは、それぞれの領域の中での技術的レベルでの応用にとどまらず、広く連携を必要とする現実社会での「ヒューマンサービス」における共通言語としての枠組みも提供するものです。

今回の公開講座では、様々な「ヒューマンサービス」の領域で、実際にどのように行動分析の枠組みや技術が応用され、将来どのように発展していけるか、「企業/Performance Management」、「看護」、「地域福祉」の領域で行動的実践・研究を行っている会員に紹介してもらい、いま関連領域に携わっている、あるいは将来、働きたいと考えている方々に、それぞれの領域での具体的な応用方法について理解を深めていただきたいと思います。そしてこの公開講座の場を、それぞれの職業的領域にかかわる実践者や研究者の方たちが相互に連絡をはかったり、領域を越えて効果的なサービスを行うための連携のネットワークを作る機会としていただきたいと思います。

関東地区以外での公開講座はこれが初めてです。行動分析学会会員の方は、是非とも、非会員の方をお誘いあわせの上でお越し下さい。講座の後、簡単な懇親会も開く予定です。

演題と演者：

■ 「Performance management：企業における行動分析」 島宗 理（鳴門教育大学）

)

■「看護における行動分析」 鎌倉やよい（愛知県立看護大学）

■「行動的コミュニティ心理学」 武藤 崇（筑波大学）

交通の便：

JR・近鉄京都駅から市バス50系統／特205系統「立命館大学前」（35分）、

阪急電車大宮駅から市バス55「立命館大学前」（20分）

京阪電車三条駅から市バス15、51、59「立命館大学前」（30分）

お問い合わせ：

立命館大学文学部哲学科心理学専攻 望月 昭

電話&fax：075-466-3189

E-mail: mochi@lt.ritsumeit.ac.jp

「ブルーベルベット」:この世は不思議なところ

シリーズ:jABAシアター ー行動分析的視点で映画をみるとー

伊藤正人(大阪市立大学)

「夢を見たの。夢の中ではこの世は闇。それはコマドリがいないからよ。あの鳥は愛の象徴だもの。最初は長い長い闇ばかりなの。ある日突然、何千羽というコマドリが放たれて、愛の光を持って舞い降りてきたの。その愛の力だけが闇の世界を光の世界に変えるの。悲劇が続くのもコマドリが来るまでよ」と、薬物、性、暴力が支配する隠された闇の世界を垣間見て、衝撃を受けた主人公ジェフリーに、ガールフレンドのサンディが語りかける。映画「ブルーベルベット」の主題を暗示する場面である。

デイヴィット・リンチ監督作品の映画「ブルーベルベット」(1986年)は、全米映画批評家協会賞を始めとする世界中の数々の賞に輝く、薬物、性、暴力を描いた問題作であり、また、彼の作品中、興行的にも最も成功したものといわれている。この映画で描かれた、明るく平凡な日常世界と暗く隠された闇の世界の対比、あるいは、夢と現実の交錯というデイヴィット・リンチ監督の思想は、後年の「ツイン・ピークス:ローラ・パーマー最期の7日間」(1992年)や最新作「ロスト・ハイウェイ」(1997年)に連なるものであり、その意味で映画「ブルーベルベット」は、彼の映画制作の原点ともいえる作品である。また、彼の作品に一貫して見られる、映像と音楽の見事な融合は、この映画でも例外ではない。

名曲「ブルーベルベット」の調べを背景に、明るく平凡な町、ランバートンに住む主人公ジェフリーの父親が、自宅で散水中に脳卒中で芝生に倒れ込む。倒れた父親の側の芝生がズームアップすると、そこには魑魅魍魎が蠢いているという暗示的な場面から映画は始まる。ジェフリーは、脳卒中で倒れた父親を病院に見舞った帰り道、道ばたの草むらで、ちぎれた人間の耳を見つける。平凡な風景の中のちぎれた耳という衝撃的出来事がジェフリーを事件に巻き込むことになる。この事件に興味を抱いたジェームスは、好奇心に駆られて、自ら事件を解明しようと、担当刑事の娘、サンディから聞き出した女性歌手のアパートに忍び込む決意をする。ジェフリーとサンディは、女性歌手が出演しているクラブに立ち寄って、「ブルーベルベット」をけだるそうに歌う女性歌手ドロシーを確認する。ジェフリーは、サンディを車に残して、一人でドロシーのアパートの部屋へ忍び込む。しかし、突然、ドロシーが部屋に戻ってきてしまい、あわててクローゼットに隠れたジェフリー。クローゼットに隠れた彼が階間見たものは何だったのか。それは、夫と息子を人質に取られて、フランクという薬物中毒の男から暴力的な性行為を強要されているドロシーの姿であった。しかし、ドロシーは、こうした暴力的な性行為にエクスタシーを感じていたのである。

隠された闇の世界を垣間見て、衝撃を受けたジェフリーは、事の真相をサンディに打ち明ける。

「この世は不思議なところだ」と話を始めるジェフリー。

「ドロシーの夫と息子は監禁されている。犯人はフランクという恐ろしい男だ。彼女に性行為を強いるために、夫の耳を切り取ったのだ。この世は悲惨だ」

「この世は不思議なものね」とジェフリーの話の内容に驚愕するサンディ。サンディは、気を取り

直して、打ちひしがれたジェフリーを励ますように見た夢の話始める。まだ、希望があるというのである。

「夢を見たの。あなたと会った晩よ。夢の中ではこの世は闇。それはコマドリがないからよ。あの鳥は愛の象徴だもの。最初は長い長い闇ばかりなの。ある日突然、何千羽というコマドリが放たれて、愛の光を持って舞い降りてきたの。その愛の力だけが闇の世界を光の世界に変えるの。悲劇が続くのもコマドリがやってくるまでよ」

闇の世界と光の世界という対比は、デイヴィット・リンチ監督の作品を貫くキーワードである。どこかで次のような彼の言葉を目にしたことがある。「暗く不安をかきたてる物事に満ちた夢。この世界には2種類の間がある。それに気付かずに眠る人。そして、それを夢見る人」(さて、あなたはどちら?) この言葉は、意識と無意識を区別するフロイト的世界を想起させる。フロイトによれば、夢は、意識的世界と無意識的世界の橋渡しなのである。デイヴィット・リンチ監督自身、「夢見る人」であり、彼の作品も、象徴的映像表現を多用している点で、フロイト的世界の映像化と見ることもできる。

心理学の歴史を振り返って見ると、フロイトの精神分析学とワトソンの行動主義は、共にヴントの心理学に対するアンチテーゼとして生まれている。精神分析学は、無意識を強調することで、行動主義は、意識の曖昧さを指摘することで、ヴントの意識心理学という側面について批判したのである。ワトソンの時代には、この両者は、ほとんど接点を持たないように思われたが、やがて新行動主義の時代になると、フロイトの心理学用語を実験の狙上にのせようとする試みが行われるようになる。例えば、「葛藤(コンフリクト)」という用語を目標勾配仮説と結びつけて定式化したミラーの巧妙な実験や「不安」という用語に関する、エステスとスキナーによる条件性情動反応の実験はこうした試みの一例であろう。行動分析学という命名そのものが、フロイトの精神分析学を意識したものであることは、よく知られている。行動分析学は、無意識を含む内的過程の存在を否定しているのではない。むしろ、それらは、外的な環境事象と外的な行動とを関連させることで、よりよく理解できると考えているのである。ゲーテの言葉「内部がそのまま外部なのだ」(エピレマ「晩年の詩」)や「ある人の性格を描写しようと骨折ることは無駄である。それに対して、彼の行為、行動を組み合わせるなら、彼の性格像が明らかになる」(「色彩論」教示編まえがき)あるいはホフマンスタールの言葉「深層は隠さねばならぬ。どこに? 表層に」(友の書)に示されているように、行動の表層における変化が重要なのである。人を深く愛するようになればなるほど、頻度や持続時間という測度ではかられる行動の強さ(例えば、ラブレターの数、いや今は電話の頻度であろうか)として現れることは、自らの体験や他者の行動を観察してみれば明らかであろう。

やがて、この衝撃的な事件も解決し、ジェフリーとサンディの周りに、平凡で明るい日常生活に戻ったある日、ジェフリーの家のキッチンの窓にコマドリがいるのに気付く。そのコマドリの嘴には大きな虫がくわえられていた(コマドリは、米国では、ごくありふれた鳥と見なされているので、ここでは、平凡な日常世界を象徴するものとして描かれている)。そして、サンディは、ジェフリーを見つめながら「この世は不思議な所ね」と呟くのであった。

映画「ブルーベルベット」は、現代人が直面している、薬物、性、暴力というセンセーショナルな題材を扱ってはいるが、光の世界が闇の世界に打ち勝つという、いわば「人間讃歌」が主題なのである。このことは、後年の「ツイン・ピークス」の最後の場面、ローラの死後、天使が降臨して、あれほどまでに、薬物と性に溺れていたローラが美しく光輝く場面に重ね合わせて見ると、より一層明らかになる。

懸賞応募の行動分析

奥田健次(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)

懸賞。これほど我々の身近に数多く溢れているのに、あってもなくてもいいものはない。どうしても必要なものはお金を出して購入する。はずれても明日から生活に困るわけではない。ところが、懸賞の当たりはずれが死活問題となっている人間がいる。日本テレビ系深夜番組「電波少年」の電波少年的懸賞生活という企画のための厳正なるオーディションから選ばれた1人の青年である。この企画の主旨は、「懸賞だけで人間は生きていくことができるか否か」を実験することである。この青年は「なすび」という。

なすびは6帖のアパートの中で懸賞に関する以外、外部との接触のない生活を送っている。散歩にでかけたり友達に電話をかけたりすることも許されておらず、まさに遮断、軟禁、幽閉された状況におかれている。毎日、ただひたすら懸賞応募のための葉書を書きまくり、当選したもので衣食を得る生活である。冷蔵庫が当選していれば、アイスクリームの詰め合わせの当たった日に全部食べてしまわなくてもよかった。缶詰セットの当選に歓喜するも、缶切りが当選するまではただの鉄の塊であることに消沈する。こんな日本一その日暮らしのなすびである。なすびには着物さえ与えられていないのだが、ペンとノートだけは与えられている。その生活を綴ったものが「懸賞日記(日本テレビ)」という本にされたのだが、これが結構売れているそうである。著者のなすび自身は

という、自分の生活が番組で放送されていることも、日記が出版されて 結構売れていることも知らされていない。なんともクレイジーな企画である。

さて、懸賞に応募する行動を具体的に記述すると、たとえば「葉書に住所、氏名、年齢、職業を書き、宛先を書く行動」、「その葉書を投函する行動」とすることができる。ちなみになすびの場合は、外出は許されていないので投函するのは番組スタッフが行っているのであろう。これらの行動はどのような行動随伴性によって成立しているのだろうか。単純に考えてみると、毎回当選するわけではなく、たまに当選するので部分強化スケジュールだといえるかもしれない。しかしながら、このような推察ではものたりない。なぜなら、葉書に必要事項を書く行動から、当選した賞品が送られてくるまでの時間間隔があまりにも大きすぎるからである。懸賞の賞品などは、たいてい忘れた頃にやってくるものである。では、葉書に必要事項を書く行動に直接影響を及ぼす効果的な随伴性は何なのか。懸賞については、「出さないことには当たらない」とか「よく当たる人はよく出しているのだ」というのを日常的に聞くことがある。これらの記述自体はあまり意味のないように思える。しかし、ここにヒントが隠されているのではないだろうか。葉書に必要事項を書く行動の直前は「出さない—当たらない(つまり、当たる可能性なし)」という状態であり、行動の直後は「当たる可能性がある」という言語行動がプロダクトされる。こういった言語行動に付随するような感覚性の強化刺激もあるだろう(ワクワク感や“pie in the sky”のような空想状態)。

ところで、私もよく当たるのである。この1年の間では、東京ドームでのプロレス観戦チケット6万円分、神戸牛ステーキハウスのペア券、ABAのTシャツである。この、「私はよく当たるんですよ」というタイプの言語行動は、J-ABAニュース1巻3号の山岸氏による「マーフィーの法則を行動分析的に考える(山岸, 1996)」で示されたものの別パターンといえるかもしれない。私の場合、悲しいほど低視聴率な深夜番組の懸賞や、お年寄りが主な視聴者であろう地方局の懸賞ばかりを集中的に5、6枚応募し、「我確信す、当選すること必定」という言語行動を発しているスナイパーである。懸賞の特徴は、「当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます」形式で、当選した場合はフィードバックされるが、はずれた人にはフィードバックなしというものである。当選したことは誇らしげに自慢するが、はずれたものはフィードバックがないので応募したことすら思い出せないことはよくある。はずれた人には「今回あなたはツキに見放され残念ながら当選しませんでしたので悪しからず・・・」などと書いた葉書を送ってやると、「また、はずれやわ」とか「ぜんぜん当たらんやないか」などという言語行動が増加するかもしれない。いずれにせよ、このようなフィードバックの偏りに影響を及ぼされる日常的な現象は懸賞以外にもあるであろう。

別のトピックになるが、「懸賞日記(杏)」の番組プロデューサーのあとがきで、なすびにペンとノートを与えたのは、幽閉された状態の人間が健康な精神状態を保つための配慮であるとしている。このプロデューサーの説明には納得できる点がある。外部との接触が遮断された状態でも、“speaker as listener”としての機能により自分の発話行動が強化され、ペンとノートは弁別刺激の1つとして機能していると思われる(ペンはお箸としても機能している様子)。確かに、番組中ブラウン管越しのなすびはいきいき新鮮、幸せそうである。自分も牢屋に閉じこめられるなら、衣服より紙と鉛筆をくれ、と思った次第である。

なすびの生活がうらやましく思える今日、なすびの懸賞に当たる幸運を祈る。

報告: 本場の熱い想いを肌身で感じて

今井義人(上智大学 心理学専攻)

今年の国際行動分析学会本大会には、中野良顯先生ご夫妻をはじめ、私と後輩1名(ともに大学院生)が上智大学から出席いたしました。全ての大会プログラムが非常に魅力的で、エキサイティングでしたが、中でも、大部屋に一同が会して、同時に行われるポスター発表は圧巻でした。連日200前後の掲示が出され、その中央にはバーも設置されて、大いに盛り上がりを見せていました。

私と後輩は、最終日の5月26(火)のプログラムまで参加しました。自分にとりましては一番興味深い発表をそこで聞くことができました。それは、Ervin, Johnston, & Frimanによる「社会的に拒否される女児の社会的相互作用を改善するためのプラスの仲間報告」でした。以下では彼らのレジュメを下に本研究をまとめてみたいと思います。

彼らによれば現在、様々な社会的スキル・カリキュラムが商品として入手できますが、これらのプログラムは実施場面外での持続的な行動変化を産み出しません。このような伝統的スキル訓練に代わる手段は、仲間に仲介された社会的相互作用に焦点を向けることです。その中でも、最近報告されている方略は、プラスの仲間報告(positive peer reporting)の使用です。ここでは、小学校1年生の拒否児の社会的相互作用とソシオメトリーに及ぼす普通教育場面におけるプラスの仲間報告の効果を検討しています。手続きを説明します。「ミツバチの餌やり」と称するトークン・システムを活用した介入では、ある特定の時間において、仲間が標的児に対してプラスのコメントをすると、蜜に見立てた綿のボールを得ることができ、さらに一定量貯まるとそれらはグループの報酬に

代えることができました。本児を含めた数人が介入の標的となりました。本児の教師はだいたい昼食後に「ミツバチ」介入を始めました。

そして、教師は一日の終わりの「サークル・タイム」でプラスの仲間報告を促しました。そこでは仲間が、標的となった児童に関して、その日に観察されたプラスの社会的行動例を皆の前で発表しました。結果は次のようでした。標的児童の社会的相互作用は、ベースラインにおいてプラスとマイナスの性質を持つものがほぼ等しく5割程度でしたが、介入段階でプラスの相互作用が急増し9割弱を占めるようになりました。しかしソシオメトリーには何の変化も見られませんでした。教師満足度調査では、非常に効果的で、実施しやすく、将来的な実用性を備えていると評価され、「年の始めに使うといい手続き」と述べられたことが明らかになりました。

本研究は、普通教育場面における小学校年齢の子どもを対象としたプラスの仲間報告の有効性に対して、予備的な支持を与えたようです。最後に、将来の研究はさらに厳密な実験的分析のもとで、本知見を再現・拡大する必要があると結ばれていました。

私は現在、大学のクリニックで、学習障害を持つ小学校児童に、小集団形式の社会的スキル訓練を実施していますが、将来的には学校現場に「心の教育」施策の一環として、このような訓練を導入したいと考えております。そのような流れの中で、プラスの仲間報告は、社会的スキル教授とその般化を視野に入れているため、これから重要な一技法でなるのではないかと強く感じました。最後に、私にとっては初めての学会参加でしたので、多くの新鮮な経験ができました。このような機会を用意して下さった中野先生に感謝申し上げたいと思います。

お願い：行動分析学が学べる教育研究データベース作成

広報委員会 望月要(メディア教育開発センター) 島宗理(鳴門教育大学)

通信制の大学や放送大学などで面接授業(スクーリング)を担当していると、大学院への進学を希望する学生から、どこの大学の、どの先生のところに行けば、自分の興味に沿った研究ができるのか、という質問をよく受けます。最近、bml(行動分析学メーリングリスト)にも、同じような話題が流れました。社会人教育ばかりではなく、通信授業による単位互換制度など、今後、大学での履修科目の選択が、より柔軟になるような動きもあるようです。

こうした社会の動きに対応すべく、『行動分析学ホームページ』では、行動分析学が学べる教育機関のデータベースを開設し、行動分析学に興味を持ち、勉強を始めたい・発展させたいと考えている方々に情報を提供したいと計画しております。つきましては、大学などで行動分析学を教えていらっしゃる会員の皆様のご協力をお願いいたします。御提供をお願いする情報は以下の7項目です。

- (1) 大学名(ふりがな)・学部・学科・専攻あるいは研究科名
- (2) 担当教員氏名(ふりがな)
- (3) 行動分析学に関する担当講義の名前、コマ数(通年、集中、前後期などの別)
- (4) 行動分析的な研究テーマでの卒論指導、修論指導、博論指導が、それぞれ可能か。
- (5) 担当者の研究テーマ(卒論・修論・博論指導が可能な場合、学生が取り組むことができるテーマ)
- (6) 連絡先(電話、住所、E-mail、URLなど)
- (7) その他、通信教育、社会人入学、単位互換など、受講・進学を考える学生にとって役立つような情報。ヒト以外の動物を研究できる場合はその種名、特色ある研究装置、施設など(3行程度以内に)。

お寄せ戴きました情報は、体裁上の変更は別にして、内容につきましては、そのままをwebページに掲載致します。行動分析学の普及のため、是非、御協力戴きたく、お願い申し上げます。

尚、情報の確実性を維持するために、今回は、授業を担当していらっしゃる御本人と、その代理の方からの情報提供に限らせて戴きたいと存じます。代理の方が情報をお寄せ戴く場合は、内容の確認と、その情報がwebで公開されることについての承諾を、授業担当の先生から受けた上でお送り下さい。

お知らせ：学情センター電子図書館サービスについて

編集委員長 藤 健一(立命館大学)

電子図書館サービス(Electronic Library Service, 略称ELS)とは、学 会や協会の発行する学術雑誌や学会発表抄録を電子的に収録して蓄積したデータベース(これが電子図書館です)から、オンラインで検索・表示・印刷する 機能を提供するサービスのことで

Q1:従来のオンライン文献検索サービスとどこが違うのでしょうか。

A1:電子図書館サービスは、文献のフルテキストを提供します。従来の文献 検索サービスでは、検索結果に表示される内容は、著者名、発表年、題名、雑誌名などの基本的書誌事項のほかに、アブストラクトを含むものが大部分です。この点、フルテキストが提供される電子図書館サービスでは、あたかもその雑誌の現物を読むように、検索したその場で、すぐに、本文に目を通すことができます。必要とあらば、その場でプリントアウトすることもできます。さらに、検索方式の自由度が高いため、従来のキーワード検索方式に加えて、ある雑誌のある巻・号を目次をたどりながらぱらぱらと目を通す様にしながら、オンラインで必要な文献を捜すこともできます。

Q2:電子図書館には、現在どのくらい収録されているのでしょうか。

A2:1998年9月現在、60学会の205タイトル(雑誌と大会抄録)が収録 ないし収録予定です。

Q3:利用するには、なにを準備すればよいのでしょうか。

A3:まず、インターネット環境と、それに接続可能な端末、WWWブラウザ が必要です。そして、電子図書館サービス専用プラグインソフトをインストールする必要があります。この専用プラグインソフトは、学情センター電子図書館のホームページからダウンロードします。

Q4:インターネット環境が未整備で、端末がない場合は利用できませんか。

A4:学情センターの広報によれば、各種の図書館に電子図書館のサービス端 末を設置するよう計画しています。この図書館に設置された端末であれば、その図書館の利用者ならだれでも、この電子図書館サービスを利用できます。もちろん、その図書館も相互利用業務に、この電子図書館サービスを利用します。

Q5:電子図書館サービスを利用するにあたって、なにか申請は必要ですか。

A5:個人で利用する場合は、必要です。図書館の端末からの利用の場合は、その図書館が利用者の代表として利用申請をします。

Q6:電子図書館サービスの利用料金は。

A6:個人の利用者番号を使用して日本行動分析学会会員が「行動分析学研究」誌を閲覧、印刷する場合は、無料です。「行動分析学研究」誌以外の雑誌を閲覧する場合は、その学会の定めた著作権使用料(利用料)を負担する必要があります。図書館などに設置された端末から電子図書館サービスを利用する場合は、その図書館の利用規定によります。

Q7:この電子図書館サービスについてもっと詳しく知りたいのですが。

A7:問い合わせ先は、以下のとおりです。

Q8:「行動分析学研究」誌は、いつから電子図書館サービスで閲覧できます か。

A8:現在収録作業中で、11月頃には閲覧可能になる予定です。また、行動 分析学会の大会発表抄録(発表論文集)も、電子図書館サービスに加入する方 向で、目下検討中です。なお、9月現在、電子図書館サービスの閲覧雑誌にある「行動分析学研究」誌は、一時的にリンクされた行動分析学会のホームペー ジの内容を表示しています。お間違えなきように。

8月の総会で「抄録の著者(発表者)が、後日他の学会誌などに投稿する場合 に、著者にとって何らかの制約を発生させる事はないか」という質問が出ました。これにつきまして、学術情報センターに問い合わせ調査をしましたところ、なんら制約は発生しないことが分かりました。すなわち、後日投稿する際に引用する記事(仮に、抄録の記事とほぼ同じであったとしても)は、その記事は引用者自身の著作物であるので引用の許諾は不要です。来年度の1999年度大会(大会校:北海道医療大学)抄録集から、電子図書館で閲覧可能にしたいと考えております。

編集後記

・今回はいろいろあって発行が遅れました。夏号だというのに.... 深く反省しております。
・筑波大学での年次大会の後、某K研究室へ訪問した時の話。ふとしたときに目についたテーブルの上のゼミノート。何気なくパラパラめくっていると、そこにはどう考えても自分のものだと思えない似顔絵が。しかも他の2人(?)の怪人&怪獣といっしょに!! た、だれがこんなイタズラを!とそこにいたM&H両氏に詰め寄ったが、後輩思いの二人は固く、口を閉ざすばかり。編集部ではこの件に関する情報を収集しています。思い当たることがある方はぜひメールでご連絡を(^)。

J-ABAニュース 第10号 発行 日本行動分析学会 〒154-0012 世田谷区駒沢1-23-1
駒沢大学文学部心理学研究室内
E-mail: j-aba@komazawa-u.ac.jp
TEL:03-3418-9305,-9303
FAX:03-3418-9126